私と明久君とある日の昼下がり

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と明久君とある日の昼下がり

【Ｎコード】
Ｎ６３０３Ｕ

【作者名】
唐笠

【あらすじ】
僕と君と過去の思い出から数日後の二人の物語。
題名を見てもわかる通り原作９、５巻のオマージュ（↑便利な言葉ですね）です。
姫路さんの誕生日についての小話もあります

（前書き）

今回は前回と前々回と比べると糖度が高めになっております。
それと前回同様、若干話が繋がっておりますので時間がありましたら『僕と君と過去の思い出』をご一読を。

瑞希ＳＩＤＥ

「♪♪♪」

今、私はとても上機嫌である場所に向かっています。

「あっ、明久君♪」

目的の場所で待っていた明久君に駆け寄ります。そう、今日は明久君とデートです。

と、言いたいところですが、残念ながら以前明久君が私のウサギの髪飾りを雨の日の泥の中に落としてしまった罪滅ぼしにと、今日の買い物に付き合ってくれることになったのです。

「あっ、姫路さんこんにちは」

「こんにちは明久君。待たせてしまいましたか？」

「ううん、今来たばかりだから心配しないで」

「そうですか。明久君を待たせちゃったんじゃないかと思ってたので、よかったです」

本当は家を出たのは２時間も前なんですが、明久君に迷惑かけちゃうと思って寄り道してたなんて言えません……

「（本当は楽しみすぎて２時間も前に家を出たなんて言えないよね

……）」

「？なにか言いました？」

「なっ、なんでもないよ！それより、早く入ろうよ」

「そうですね」

明久君は絶対になにかを隠していますが、今はそれよりも時間がほしいのでデパートに入ります。
店内は空調が効いていて、とても快適です。

「まずはどこに行こうか？」

「明久君の好きな所でいいですよ」

私はここに用があるんじゃなくて、明久君と一緒にいることに意味があるんですからね。

「好きな所って言ってもなぁ……（姫路さんと出かける口実がほしくて誘っただけだし……）」

「またなにか言いました？」

「いや、なんでもないって。本当になんでもないから。えっと……じゃあ、服でも見に行く？」

「服ですか。そうですね、明久君がびっくりするような服でも買いに行きましょう」

「えええ！？僕がびっくりするようなのって……できれば普通のを選んでほしいんだけど」

慌てる明久君を見ると嬉しくなっちゃいます。だって、それだけ私を女の子として見てくれているってことですから。

「冗談ですよ。さあ、行きますよ明久君♪」

つい嬉しくなって明久君の手をひいて走り出します。

「うぉっと、引っ張らないでよ姫路さん！」

～婦人服売場～

「これなんてどうですか？」

手近にある肩からの紐で支えるタイプの白いワンピースを手に取り、明久君に見せます。

「ええっと……それは姫路さんにはちょっと似合わないんじゃないかな……」

「じゃあ、これはどうですか？」

次は胸の部分のゆるみを調整できるタイプの薄ピンク色の服を選びます。これは来年の夏に良さそうですね。

「それもちょっと……」

中々いい評価をくれない明久君に若干不満を感じながらも次の服を選びます。あっ、これなんかも来年の夏に良さそうですね。次の服はダンスパーティーで着るような肩にかけるところがないワンピースです。

「それはもっと無理！」

「もう、なんでさっきから否定的な意見ばかりなんですか！」

「いや、ほら僕が姫路さんに似合いそうなの選んであげるから、あっちの方行こうか？（姫路さんがあんなの着たら理性がもたないって……）」

「明久君が選んでくれるなら行きます」

明久君の後半の聞こえなかった言葉になぜだか無性に嬉しくなりながら、私は手を引かれ婦人服売場（夏物セール）を離れます。

～ゲームセンター～

「なにして遊ぼうか？」

あれから婦人服売場をまわったのですが結局どれにするか決まらず、ゲームセンターで遊ぶことになり、今はそのゲームセンターにいます。

「前みたいにクイズゲームでもしますか？」

「そうだね。あそこにあるしやろうか」

私たち二人はそれぞれ台に設置されている椅子に座って１００円を入れます。

『得意ジャンルを選択してください』

「僕は今回もスポーツかな」

「私は雑学にしますね」

それぞれ得意ジャンルを選択していよいよゲームが始まります。

『第１問　還暦とは６０歳になった人を祝うものだが、もとはなにからきている？』

「う～ん、これかな？」

『プレイヤー１　その場のノリで決めた』

さすがにそれはないと思うんですけど……

明久君の珍回答に驚きながらも正解を選択します。

『プレイヤー２　干支と旧暦が６０年おきで揃うから』

『プレイヤー２正解！』

「えええ！？これじゃなかったの！？」

明久君、本当にこれだと思ってたんですか……？

「明久君、まだ一問目ですから気を取り直していきましょう」

「そっ、そうだね。まだ勝負は始まったばかりだよね」

私たちはそれぞれ画面に向き直ると2問目が出題されます。

『第2問　野球でファールゾーンを表す黄色のポールに打球が当たった場合、どうなる？』

うっ、私の苦手なスポーツの問題ですね。

黄色のポールはファールゾーンを表すんですから、それに当たった場合は観客席に入って危険ですよね。更にポールといえどもしなるわけですから、跳ね返す力も強くなるはずです。ってことは――――

『プレイヤー2　打者は退場』

これで明久君も私を運動音痴なんて思わないはずです。そう自信満々で明久君の答えがでるのを待ちます。

『プレイヤー1　ホームラン』

あれ……？

私の答えと違います。もしかして明久君は押し間違えちゃったんでしょうか？

『プレイヤー１正解！』

「えええ！？違うんですか！？」

驚きです。まさかあんなに危険なことをしといて祝福される立場にあるなんて……

それからも前回と同じような一進一退の攻防が繰り広げられます。でもこのゲームの問題数は奇数になっていますから、この最終問題で決着がつきます。

「負けませんからね明久君」

「僕だって手加減しないよ」

明久君もやる気のようです。最終問題はどちらかの得意ジャンルからランダムに選ばれますから、私も負けてられません。

『第２０問　１２／２１はなんの日でしょう？』

「あっ……」

最終問題は私の選んだ雑学のジャンルからの出題でした。ただ――

「この日って……」

明久君の呟きに複雑な気持ちになります。

そう、この日は私の誕生日で、明久君がそれを覚えていてくれたのは嬉しいんですけど……

嬉しいんですけど、この日は――

『プレイヤー2　遠距離恋愛の日』

私の誕生日は遠距離恋愛の日なんです。

私は明久君のそばにはいられないってことなんでしょうか……

私は明久君のそばにいたらダメなんでしょうか……

私は明久君と同じ時を共有したら、一緒に笑いあったらいけないんでしょうか……

頬を伝う涙に気づかれないように、明久君の答えを待ちます。

『プレイヤー1　恋人同士がクリスマスに再会する日』

やっぱり明久君は知らなかったんですね。そうですよね、ただの友達の誕生日がなんの日なんて調べたりしませんし……

『プレイヤー1・2正解！』

「えっ？」

画面に映る不思議な結果に戸惑います。だって明久君と私の答えは違うものだったんですから両者正解なんて……

「あれ？姫路さん、もしかして知らなかったの？」

「なっ、なにがですか？」

明久君に気づかれないように涙を拭いて聞きます。

「姫路さんの誕生日って遠距離恋愛の日だけど、それには続きがあって、クリスマスに恋人同士が愛を確認し合う日らしいよ」

「って、ことは……」

「そう、僕も姫路さんも両方正解ってことだよ」

そう言って笑う明久君に飛び付きたくなる衝動を抑えながら、笑い返します。

「もしかして私のために調べてくれたんですか？」

冗談混じりに言うと、なぜだか急に明久君は落ち着きをなくしてそわそわしだしました。

「別に調べたとかそんなんじゃなくて、偶然調べてしっていちゃったんじゃなかったりしたわけで」

「ふふっ、変な明久君」

戸惑う明久君を見てるとつい笑いが込み上げてきちゃいます。

でも、こうやって笑えるのも明久君がいてくれるからなんですよ

明久君が私の一番嫌いだった日を一番好きな日に変えてくれたからなんですよ

明久君がいるから、いいえ、明久君がいれば私は幸せなんですよ

だから――――

「まだまだ一緒に思い出をつくりましょうね」

「？」

「やっぱり明久君は鈍いです」

「？？？」

「次の所に行きますよ」

まったくもって理解がいっていないという風な明久君を引っ張り、ゲームセンターを後にします。

～スイーツバイキング～

「姫路さん、こっちのモンブランとっておく？」

「お願いします。こっちも明久君のぶんのティラミスとっておきますか？」

「うん、お願いするよ」

スイーツバイキングにいる私たちはそれぞれ違った列に並んでいるので、お互いにコンタクトをとって進んでいきます。

「……瑞希、こんにちは」

「ふぇ！？しょ、翔子ちゃん……」

突然、後ろかけられた声に振り向くと翔子ちゃんがいました。

「……今日は雄二とデート。瑞希も吉井と？」

「べっ、別に私は明久君とデートってわけじゃなくて……」

「……瑞希も吉井もわかりやすい」

なんで明久君の名前がでてくるんでしょう？

「わかりやすいのは否定しませんけど、明久君にもなにかあったんですか？」

「で、二人とも鈍い」

「私はそうですけど、明久君は運動神経いいですよ？」

「やっぱり鈍い」

翔子ちゃんのいまいちわからない言葉に首を傾げながらも列を一緒に進んでいきます。

「……雄二はショートケーキが好き」

そう言って、翔子ちゃんはショートケーキをトレイに乗せます。

そういえば明久君はスイーツ類はなにが好きなんでしょうか？……
……わかりません……
私って案外、明久君のこと知らないんですね……

「瑞希どうしたの？」

「いえ、私って明久君の事をなにも知らないんだと思いまして……」

「そんなことはない。瑞希しか知らない吉井のこともたくさんある」

「私しか知らない明久君……ですか？」

私しか知らない明久君ってなんでしょう？
小学生の時のことでも私以外に知っている人はいますし、学校でのことならなおさらです。うーん、なんなんでしょうか？

「……ちなみに答えは秘密。だけど、ヒント。瑞希の知らない所で瑞希にしか見せない顔がある」
私にしか見せない顔なのに、私のいない所で見せる顔ってなんでしょう？
考え込みながらも進んでいくと、ある物が目に入ります。

「あっ、これは……」

私の呟きに翔子ちゃんが覗き込んできます。

「……瑞希、クレープがどうしたの？」

「もしかしたら、明久君はこれを食べたいかもしれないんです」

「……瑞希がなにを言っているのかわからない」
翔子ちゃんがわからないのも無理はありませんね。だってこれは――
「明久君は一度、クレープを食べ損ねたことがあるんです。だから、もしかしたらと思いまして」
「……瑞希は吉井のことをよく見てる」
「坂本君の意外な好物まで知っている翔子ちゃんほどじゃないですよ」
恥ずかしさで赤くなりながらもクレープをトレイに納めます。
「……あそこに雄二と吉井がいる」
翔子ちゃんの指さす方を見ますと、明久君と坂本君が列から外れてなにかを話しています。
「（じゃあ雄二、今日のことは他言無用ってことで）」
「（当たり前だ。俺だってまだ死にたくねえしな）」
二人ともなにをはなしているんでしょうか？
「……瑞希、はやく行く」
「そうですね。はやく明久君たちの所に行きましょう」

私たちは列から外れて、明久君たちの所を目指します。

「それにしても、まさか明久と姫路がデートとは驚きだな」

「違うって雄二！今日はそんなんじゃなくて、ただ買い物しにきただけだから！ねっ、姫路さん」

「えぇとですね……」

明久君たちと合流して同じ席で食べることになったのですが、席につくなり坂本君がとんでもないことを言い出しました……
これが原因で明久君が今後、私と出掛けてくれなくなったらどうしましょう……

「そういう雄二だって霧島さんとデートじゃないか」

「俺は「デートをしたかっただけ」だ！って翔子、俺の言葉に被せるな！」

「……雄二は照れ屋さん」

「この状況で照れるやつはいねえ！」

「くすくす、本当に坂本君と翔子ちゃんは仲良しですね」

あまりにも微笑ましい光景に思わず笑いがでてしまいます。坂本君も早く正直になればいいのにですね。

「姫路、俺の意思をねじ曲げた挙げ句、照れ屋などなんだの言って被害を拡大させてるやつと仲良しに見えるか？」

「そんなこと言っても、顔は嫌がってませんよ」

「雄二もいい加減素直になりなよ」

「だから違うんだって！俺は翔子の服選びについてきただけだ！」

大声で言い訳をする坂本君を他所に、私は向かいの席の明久君と目を見合わせます。どうやら明久君も同じことを考えてたらしく同時にうなずきます。

「ってことは雄二は霧島さんの服が気になるんだ？」

「んなっ！？そんなわけあるか！」

「……雄二嬉しい」

「二人ともラブラブですね」

「俺は無理やり――――明久！」

「うん、雄二！」

突然、二人でアイコンタクトをとると、それぞれバックからカツラとメガネを取り出しました。

「……雄二どうしたの？」

「ちょっと待て翔子。というか俺のことを雄二って呼ぶな。俺は今から三十郎だ」

「……わかった、三十郎」

翔子ちゃんと坂本君の奇妙な会話に呆気にとられていた私ですが、明久君の方を見直すと爆発アフロに丸メガネと本当になにを目指したのかわからない人になっていました……

「明久君…？」

「違うよ姫路さん。僕は今からレベッカだよ」

「レベッカ……ですか…」

爆発アフロに丸メガネでレベッカ……

明久君、いつの間にそんな変な趣味に目覚めたんですか……？

「三十郎、もうすぐ近くだよね」

「あぁ。なんでこんな時に限ってあいつらが……」

「二人ともどうしたんですか？」

なにかを警戒するように見回す明久君と坂本君は見た目もあいまって、目立ちすぎています……

「いや、近くにFクラスの誰かがいるんだよ」

「だから、翔子たちといるこの状況で見つかる訳にはいかないんだ」

「……わかった。雄二が今日一日、私と手を繋いで行動してくれるって言うなら協力する」

「なっ……いや、背に腹は変えられんか。わかった、それでいいから協力してくれ」

「……じゃあ早速」

言うないなや、翔子ちゃんは坂本君の横に椅子を持っていき、坂本君の腕に抱きつきます。

「おいこら、離れろ翔子！」

「……三十郎はばらされたいの？」

「ちくょう、人の足元見やがって……」

「はい、三十郎あーん」

「ふぉぐ！？ほいふめほみふぎばそふほ！（おい、詰め込みすぎだ翔子！）」

坂本君と翔子ちゃんはとても楽しそうです。できれば私も……

そう思って明久君の方を見ると、Ｆクラスのみんなに見つかるのを恐れているのかそわそわしていました。

「あのぅ、レベッカ君？」

「なっ、なに姫路さん」

今思うと、なぜ私たちの名前には変更がないんでしょうか？私はともかく、翔子ちゃんは変えないと坂本君だってばれちゃいますよ？それにしても翔子ちゃんがうらやましいです。私も明久君とあんな風に……

「レベッカ君も今日一日、私と手を繋いで行動してくれるなら協力してあげますよ？」

「なっ、なに言ってるの姫路さん！？」

慌てる明久君を見て正常な判断が戻ってきます。私はなんでこんな恥ずかしいことを言ってたんでしょう……

なっ、なにか言い訳を考えませんと……

「ほらあれですよ。翔子ちゃんたちがあんな感じなのに、私たちが普通だったら目立ってしまうんじゃないかと思いまして……」

「あっ、そうだよね。あはははは……じゃあ、姫路さんには悪いけど協力しても「いたぞ！吉井と坂本だ！」なんかバレた！！」

「逃げるぞ！」

明久君と坂本君はそう言うと、食器も片付けていないのに私と翔子ちゃんの手を引っ張って走り出してしまいました。代金は前払い制度だから良かったんですけど……

「雄二、どうしてバレたんだろう！？」

「お前の変装が半端に目立つからだよ！」

いえ、半端にじゃなく、かなり目立っています……

「雄二の方が半端に目立ってるよ！」

「んなわけあるか！」

いえ、坂本君のハゲヅラに片メガネも充分に目立っています……

「……二人とも喧嘩しない」

「そうですよ。みなさんに追い付かれちゃいますよ？」

「いくらなんでもそんな速くは――――って雄二、須川君と福村君がものすごい勢いで追いかけてきてるよ！」

明久君が後ろを向きながらも更にスピードを上げます。

「なに！？しょうがねえ、翔子背中につかまれ！」

「……うん」

翔子ちゃんが坂本君の肩につかまると、坂本君は一気にスピードを上げました。

「姫路さんも早く！」

「えっ、いいんですか」

「じゃないと僕が須川君たちに捕まっちゃうよ！」

「はいっ！」

私も明久君の背中につかまると、明久君も坂本君に追い付くほどのスピードを出しました。

明久君の背中は予想していたのよりも大きく、頼りがいがありました。できることなら、この背中にすべてを預けて眠りにつきたいです……

「……ふぇ？明久君？」

目をあけると、そこには寝ている私を覗き込んでいる明久君がいました。明久君も私が起きたのに気づいたらしく、出しかけていた手を引っ込めます。

「あっ、いやこれは違うんだ姫路さん」

「？？？」

明久君はなにをそんなに焦っているんでしょう？

「その、姫路さんの髪の毛にゴミがついていたからとろうとしただけで、決して触ろうとしたわけじゃなくて……」

本当に明久君は嘘が下手ですね。慌ててる明久君を見れば誰でもわかりますよ？

「いいですよ。髪、触っても」

「えっ……？」

「今日一日のお礼です」

明久君がなんで私の髪を触りたいのか知りませんが、明久君が私に触れたいって言っているのに断る理由なんてありません。

「それにまだゴミがとれていないはずですよね？とってくれないんですか？」

「本当にいいの？」

「ゴミをとるのにそんなに気負いがいりますか？」

本当は私の髪にゴミなんてついていないのは知っています。明久君の顔にそうかいてありますから。

だけど、私は目をつぶって明久君が触れてくれるのをただ待ちます。

「じゃあ姫路さん、ごめん」

「ふぁ……」

明久君が私の髪を撫でてきているのがわかります……

まるで赤子をあやすように、それでいて力強さを感じる手。

それは私の髪をまるで割れ物を扱うかのようにそっと撫でてきます。

でも、その手も段々と撫でる範囲が大きく深くなってきています。
だけれど、それに不快感はなく、ただ幸せだけを感じている私がいました。
私はその幸せに身を委ね、思考を手放そうとした瞬間———

「ひゃぁ！」

「あっ、ごめん姫路さん！」

「あっ、いえ。私の方こそすいません。ただ、明久君の指が首筋に触れてびっくりしちゃっただけですから」

「うん……」

「……」

「……」

「そっ、そういえば翔子ちゃんたちはどうしたんですか？」

場を繋ぐために話題を作ります。

「雄二たちなら須川君たちをまいた後に帰っちゃったよ……」

「そっ、そうなんですね……」

「……」

「……」

またお互いに沈黙。そこからなんともいえない微妙な雰囲気が漂います。というか、私はなんて恥ずかしいことをしてたんでしょう……その、あの……まるで恋人同士みたいなことを……

恋人……

その単語で今日、明久君が教えてくれた素晴らしい日のことを思い出します。

明久君のおかげで一番嫌いだった日が一番好きな日に変わったことを。

明久君からしたら今日もその日も、なんてことはない普通の一日でも私にとっては大切な一日。

明久君がいなかったら出逢えなかった大切な一日。

そんな大切な一日をくれた明久君に一言———

「明久君」

「姫路さん」

二人同時にお互いの名を呼んでしまいます。

「明久君お先にどうぞ」

「いや姫路さんこそ先に」

「じゃあ、一緒に言いませんか？」

「じゃあ、そうしようか」

「「せーの」」

「「今日一日ありがとう（ございます）」」

（後書き）

これ書いてて思ったのですが、これらの短編はバカテス短編集というシリーズに分類しておきながら、実態は明瑞短編集なんですよね。いっそのこと、明瑞短編集にシリーズ名かえましょうかね？
ちなみに誕生日の話は実話です。なので原作でも明瑞ｅｎｄが見れるんじゃないかとそわそわしています。

では、今回も作者の妄想にお付き合いありがとうございました！
感想やご意見などがありましたらなんなりとお申しつけください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6303u/

私と明久君とある日の昼下がり

2011年8月10日18時39分発行